



特定医療法人社団

鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス
<http://www.goodream.co.jp/hoyukai/>

第32号

発行:2008年12月15日
発行責任者:
特定医療法人社団 鵬友会
事務局長 池島 守

認知症の早期診断と鑑別診断について

横浜ほうゆう病院 副院長

日野 博昭



横浜ほうゆう病院は本邦でも数少ない認知症専門の精神科病院です。小阪院長の着任以来、入院の依頼のみならず、外来受診の希望者が増えています。特に多いのは、小阪院長が提唱された「レビー小体型認知症」の鑑別診断の依頼です。認知症の鑑別診断は現在でも確実な方法はなく、病歴・現症・画像所見を中心に他の検査を加えて総合的に判断します。ただ、その治療についてはいまだに決定的な方法はないのが現状です。最近、新聞・テレビなどで「認知症の早期診断」をすすめる記事や報道を目にすることが多くなっています。いまだに治療法がないのにどうして?と思われる方も多いかもしれません。

平成18年に当院に入院した患者さんの約20%が在宅、つまり自宅からの入院でした。その中でも早期に認知症専門医に診断を受けていた方は少なく、認知症の進行に伴って出現した周辺症状(例えば徘徊・妄想・興奮・暴力など)に困り果て、やっと当院にたどり着いたという方がほとんどでした。かかりつけ医より「認知症」と診断された方もいらっしゃるようですが、「認知症」は病名ではなく、認知症症状を呈する疾患群の総称です。その認知症の鑑別、つまり「アルツハイマー型」・「レビー小体型」・「脳血管性」などの診断によって、実はその治療法や経過(予後)などが大きく異なってきます。

治療法については、「アルツハイマー型」は本邦では塩酸ドネペジル(商品名アリセプト)が唯一治療薬として承認されています。「進行を遅らせる」という効果のみですが、大変な介護の状況を少しでも遅らせることには大きな意義があります。「レビー小体型」については、残念ながらまだ適応のある薬はありません。しかし、塩酸ドネペジルが「レビー小体型」にも効果があるという学術

報告が増えてきており、小阪院長を医学専門家として製薬会社による臨床治験が行われています。この治験は世界に先駆けて本邦で行なわれ、当院も参加しています。塩酸ドネペジルは「アルツハイマー型」より「レビー小体型」の方がより効果があるという報告もあり、治験の結果が期待されるところです。

経過については、進行の度合いや出現する症状などが疾患によって変わります。例えば、「アルツハイマー型」ではもの忘れから始まり、徐々に仕事や家事などこれまでできたことができなくなります。この頃は意欲がなく、閉じこもりがちとなりやすいためデイサービスが必要となることがあります。さらに進むと身の回りのことも出来なくなり、介護の必要性が増えていきます。また、徘徊や妄想などの周辺症状も活発となり、介護サービスでの対応でうまくいかないと入院を含めた精神科治療も検討する必要が出てきます。早期に「アルツハイマー型」と診断されていれば、将来に対する医療・介護の実際の準備のみならず、「心の準備」もでき、困り果てることも少ないと思います。「レビー小体型」では、タイプによる違いや症状の変動もあるため、一概には言えませんが、認知症症状が始まる前か、始まったと同時に特徴的な幻視がみられることで早期に診断することも可能です。ここから、後の認知症が顕在化やパーキンソン症状の出現などを予測することができ、介護に対する心構えができるかと思えます。

当院では、認知症の鑑別診断・早期診断を行っています。最近もの忘れが多くなったとお感じの方、身内の方のもの忘れが気になる方、また一度専門医による認知症の鑑別診断をご希望の方は是非当院の医療連携室までご連絡ください。

横浜ほうゆう病院 電話 [045-360-8787](tel:045-360-8787)

学会発表月間 2008

【 第7回 日本リハビリテーション看護学会 平成20年11月8日 】

演題

ヒューマンエラーを防ぐために
～インシュリン注射準備に
危険予知訓練（KYT）導入を試みて～



所属 横浜ほうゆう病院
東1病棟
演者 佐久間 由美子

演題

在宅生活支えたりハビリテーション看護の実践
～訪問看護で高齢者のADLが向上した事例から～



所属 湘南泉病院
在宅医療部
演者 佐藤 典子
片桐 恵美子

【 第27回 神奈川県病院学会 平成20年11月18日 】

演題

終末期患者につきそご家族さまの
気持ちから終末期患者の家族看護を
考察する



所属 湘南泉病院 D病棟
演者 佐藤 洋子

演題

看護記録監査の取り組みから
看護の本質を追求する



所属 湘南泉病院 看護部
看護記録委員会
演者 吉田 文子

演題

BSCによる看護目標管理の実践 第二報
～認知症専門病院に新人看護師長を迎えて～
所属 横浜ほうゆう病院 看護部
演者 片瀬 克子



【 第11回 神奈川看護学会 平成20年11月29日 】

演題

認知症専門病院におけるNSTの導入と効果
～NSTの関わりによって
変化のあった事例より～



所属 横浜ほうゆう病院
東3病棟
演者 大西 登志美

演題

抑制手袋による問題点の改善
～改良手袋を使用しての効果～



所属 新中川病院
3B病棟
演者 大野 正代
松本 真利子

今月は3つの学会が行なわれ、各学会に鵬友会職員が発表しました。学会での発表では研究活動の新しい理論やシステムをつくり上げるという高度な内容のものから、臨床現場での取り組みに関する事例報告といった理論化途上段階のものまで、さまざまなものがでております。どの研究活動にも、最終的には「よりよい看護を実現したい」という目標があり、それぞれの発表内容を聞いて、新しい発見や看護の一般化、理論化につながったものと思います。

一步現場から離れてより大きな視点から見てみることは、違ったものが見えてきたり、第三者の意見に耳を傾けるといふことも自分の経験にとってもプラスだと思います。学会、研修は自分を成長させてくれるものであります。これを院内研修と、うまく組み合わせることで、よりよい向上が得られるのではないかと思います。 記者：上村 義孝